

平成23年 11月26日

東北農業経済学会 宮城大会 プレシンポジウム

飯館村における計画的避難をめぐる地域の葛藤

福島大学

うつくしまふくしま未来支援センター
(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

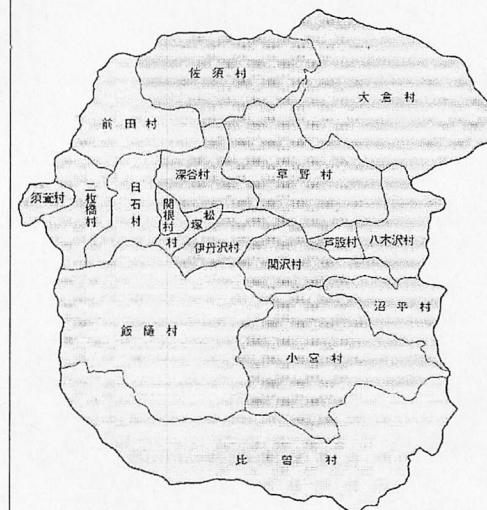
佐藤 彰彦

mail: satoa@sa2.so-net.ne.jp

1

2-1. 飯館村の概要

- 昭和31年9月30日に人口も予算規模もほぼ同じ大館村と飯曾村が合併
- 人口約6,300人
- 高齢化率約30%
- 面積230.13km²
- 30年来、旧村間対立と冷害対策が大きな課題
→2010年に再燃(公民館整備)



2

1. はじめに

●自己紹介

●飯館村とのかかわり

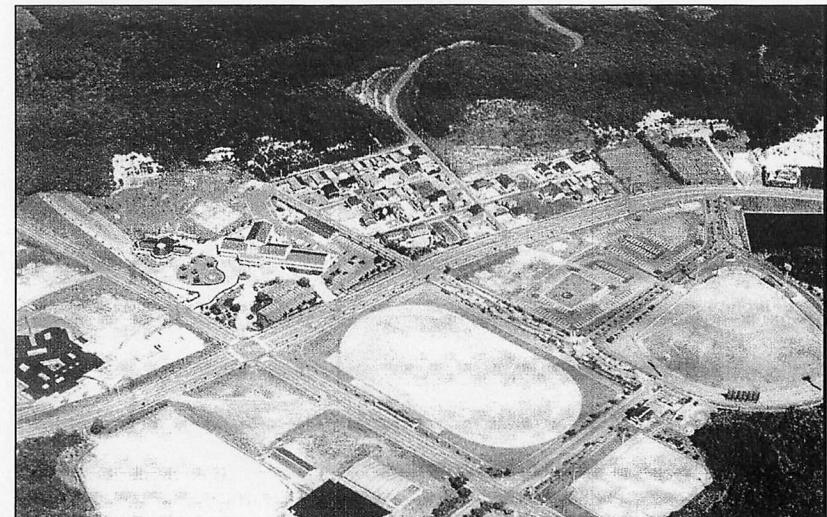
- 第4次～第5次総合振興計画：延べ4,000人/6,700人

【策定委員S氏（石材加工業、当時40代男性）の発言】

「行政コンサルだか何だか知らんけど、東京から来たよそ者に、『これまでの住民の方々の議論をまとめるところになります』なんて、分かったようなことを示されても困るんだよね。我々は、村長から委嘱を受けて、今後10年の村づくりのために、『厳しい財政の中で自立して、できるだけ金をかけずに自分たちで知恵を絞って汗をかきながら、計画づくりをやってくれ』って頼まれて（この部会に）来てるんだよね。だから、この仕事はあんたらの仕事じゃなくて、オレらの仕事なんだよ」

2

2-2. 飯館村の概要



旧2村の中心に建設されたシビックゾーン

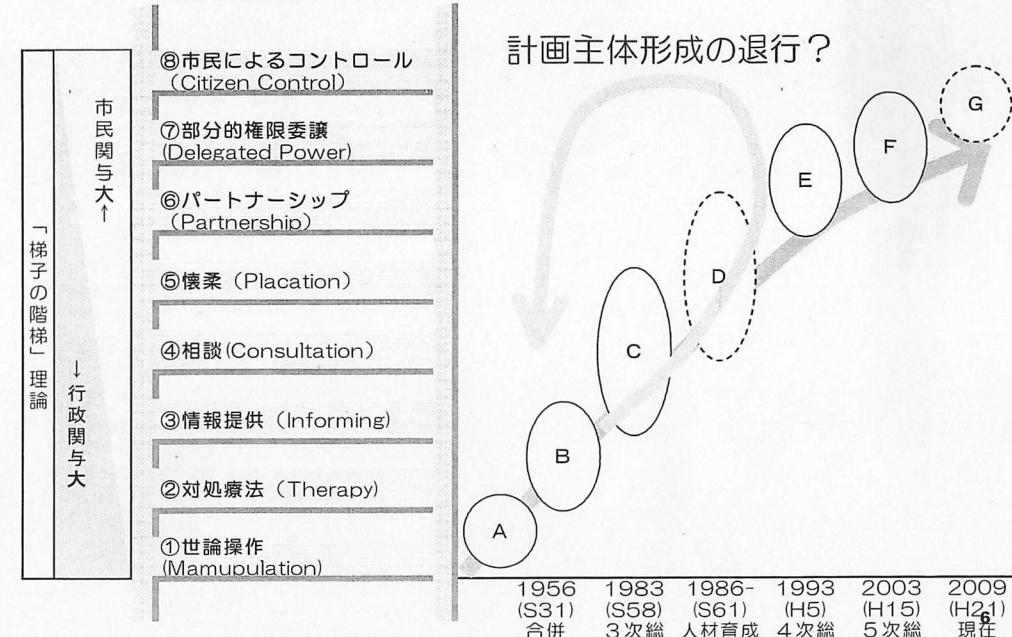
4

3-1. 飯館村の村づくりの経緯

- ・村づくりの仕掛け：1980年代～
S60：3次総「100人委員会」→シビックゾーン案
→現村長・前議員：例）委員会等～区長～議員というパス
- ・竹下内閣ふるさと創生1億円
→村民企画会議(30～40代の村民)
：農村楽園基金創設
：やまびこ運動（各行政区100万円交付）
- ・やまびこ運動から地区別計画へ
：地区ごとに10年間のグランドデザイン～事業化
- ・協議会方式=飯館方式 →「農地・水」「中山間」へ
：地区別の計画・事業を審査～フィードバック

5

3-2. 飯館村の村づくりの経緯



3-3. 飯館村の村づくりの経緯

- ・やまびこ運動～4次総で獲得した「成功体験」
→地区別方式、協議会方式の定式化 (cf.リフズヰー)

ex.住民：行政区長のなり手はいない／やりたがらない
役場：区長が半分交替したのは人が育っている証拠
- ・5次総地区別：「やることなくなった」「疲れた」
- ・農地・水／中山間：補助金施策がコミュニティを衰退・崩壊
- ・行政と協力関係にあった村民の行政離れが観察
→起業や販路開拓、自主財源の確保、独自取組...
→「負けねど飯館!!」の若手メンバーしかしり
- ・2000年以降の問題が3. 11以降に噴出？

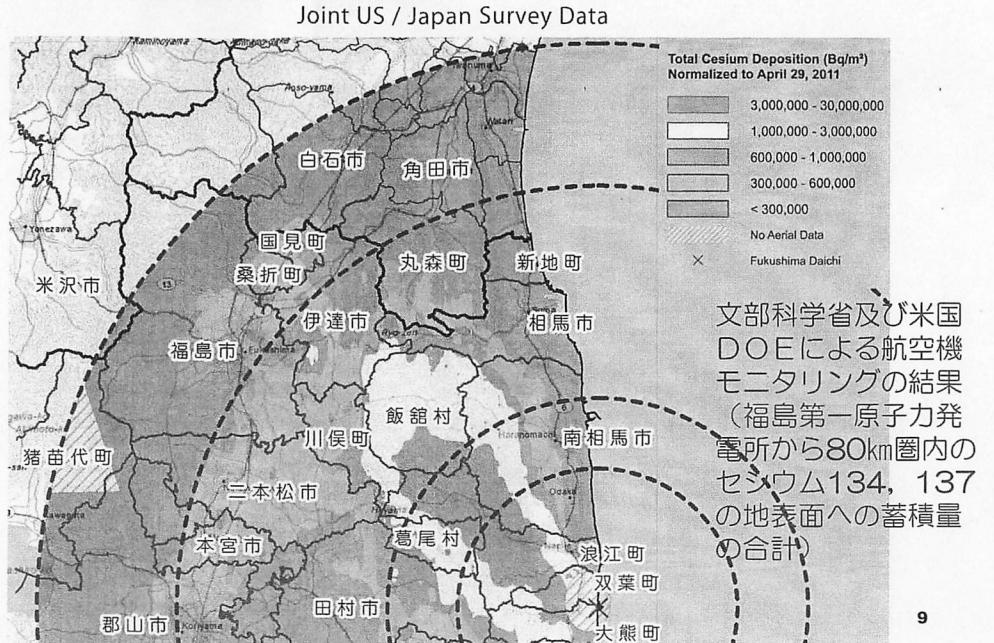
7

3-4. 飯館村の村づくりの経緯

- ・成功をおさめたかにみえた村づくり...
2000年以降、住民・行政間の意識が乖離傾向に?
→行政改革、合併問題を契機とした行財政運営
：自治・権限付与という名の効率化 (cf.玉野2008)
- ：基本構想「までい」の理念～具現化の解釈？
(職員、議員、村民からの指摘)

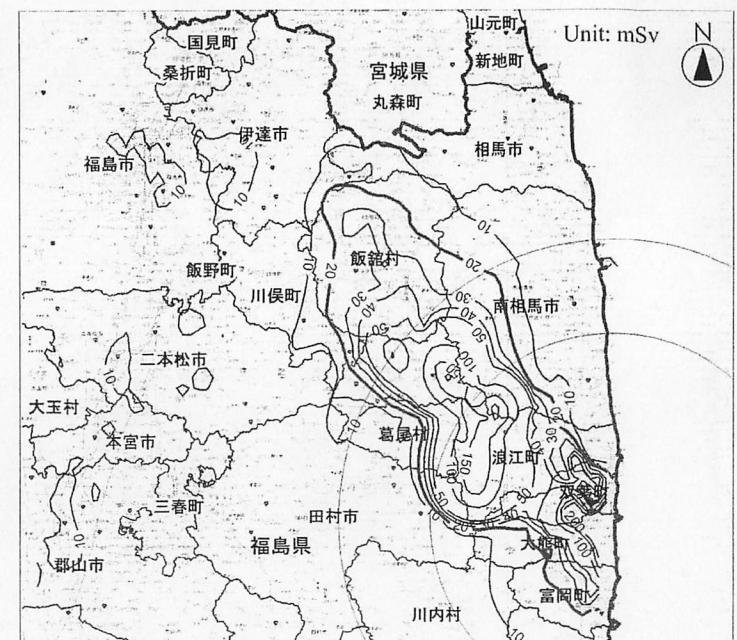
8

4-1. 放射能汚染の実際



4-2. 放射能汚染の実際

(平成24年3月11日までの積算線量)



5-1. 計画的避難の実際

- 4月11日、計画的避難区域の設定方針
→これに先立ち、避難対策に着手
- 4月22日、計画的避難区域に指定
- 避難方針として...
→村から概ね1時間圏内
→避難先から仕事や農作業に通い、生活基盤を維持
→体育館等への集団的避難は認めず
- 県北地域を中心に避難先確保に奔走
- <避難後発>ゆえ、マスとして避難先確保が困難
+避難の優先順位 が相まってコミュニティ離散
- 8月中旬に避難完了

5-2. 計画的避難の実際

- 原発爆発後、3月後半には
人口の約半数（約3000人）程度が避難したと推測
→4月の会社操業再開、川俣町での学校新学期開始
- 5000人近くまで人口が戻ったとの見方
【以下見守り隊の推測ほか】
- 6/6の見守り隊開始時点：4000人以上が在住
- 6/22の役場機能移転以前：3000人前後 //
- 6/24の役場機能移転完了：2000人以上 //
- 7/中（～7/末仮設工事）：400人程度（民報）
- 8/中：70人程度（民報）
- 10/初 13人+特養以外 9割1H圏、うち7割借上

6. 避難をめぐるコミュニティ構造の崩壊・変化

- 家族が離散し避難せざるを得ない...1700から2700へ
(大家族と生活空間とライフスタイル)
 - 「一度離散すればもとの生活には戻れない」
 - 「貧しくとも、土地・家屋・食に困らず
生活できた」(所得水準57位／59市町村)
 - 「爺ちゃん婆ちゃんらと離れて暮らすなんて
考えらんねえ」：避難を遅らせる結果に...
- 土地や歴史風土に根ざした生活喪失への悲しみ／
挫折感
 - 計り知れない精神的苦痛・被害
 - 匆の恵みを当たり前に受けられる暮らし
：そうしたく資源>を復興に繋げられないか？

13

7-1. 帰村への想いと変容する村民意識

- ・ 高齢者を中心に「離れたくない」「避難はしない」
- ・ 仮設住宅や借上げ住宅での暮らしの不安・ストレス
 - 避難所から自宅に戻る避難者
- ・ 「戻りたいけど、暮らしやしごと」 「モノも売れねえ」
 - 明るみになる放射能汚染の深刻さ
- ・ 村の<2年を目処に帰村><除染>への疑問と批判
- ・ 10～12月にかけて約20回の村民懇談会
 - 除染の実現性への疑問
 - 3000億円超の除染予算よりも、生活／事業再建を
 - 早期の集団的な移転に向けた取組と選択の自由を
- ・ 仮置き場等をめぐる議論も...

14

7-2. 帰村への想いと変容する村民意識

- ・ 「働きてえ、働かねえと気が狂っちゃいそうだ」
 - その一方で、<就業意欲の低下>が問題
- ・ 「これまで築いたものを失っちまって、どうにか働き
たくても、気力は日ごとに薄れてっちまう」
 - 避難先での閉じこもり、鬱傾向の増加
- ・ 共同農園などの取組に対して、消極的な声も...
 - <就業意欲の低下>と「3.11以前には戻れない」
(当たり前の暮らしを取り戻せない) という気持ち

15

8-1. 暮らしやしごとの再建に向けた取組へ

- ① 仮設周辺での共同農園の取組
 - ・ 村民有志が独自に土地を探し、仮設住民に働きかけ
 - ・ コミュニティ内の小さな経済循環を目指す
 - ・ <百姓>の自覚、生きがいづくり、小遣い稼ぎ
- ② 農家の女性たちを中心とした起業に向けた取組
 - ・ 女性どうしの声かけから、「このまま何もしなければ、ダメになる」「（絶望に暮れていたけど）前向きに生きたい」等といった想いをもった、農家女性たちが主体となった取組
 - もち、加工品、農家レストラン、安全基準...
- ③ 農家女性等の持つ技術や伝統の継承
 - ・ 地域や人に宿る知恵や技術の移出・移転に着目
 - ・ 関東都市部との連携に着手

16

8-2. 暮らしやしごとの再建に向けた取組へ

●自立した活動に取り組んできた人たちが主体

- ・立ち上げ資金や専門知識の欠如
- ・助成金や公的な補助・支援事業の使い勝手
→精算払いによって、当初活動に着手できず
- 補助・支援事業の申請と流用？：意欲を阻害
- 本来的な活動に注力できない？

●中長期的な事業継続に向けて

- ・公的な補助・支援への依存から自立～事業継続へ
→その転換をどう図っていくか

●安心・安全をどう担保・周知していくか

- ・ウクライナ基準以下のルール設定…とその周知

●外部消費者とのコーディネートなど

- ・無形の知恵・技術で収入を得る方法やノウハウ等¹⁷

おわりに

～震災前から体制・住民間に潜在していた課題？～

- ・20～30年前の社会構造下の成功体験と経路依存
- ・地方自治をめぐる制度・社会システムへの取込
- ・体制側の人間と生活者の間の階級・階層格差
- ・生活体験の非共有化と対話機会の喪失
→（起業を含め）草の根レベルの生活防衛が噴出
- 家族やコミュニティが離散した今こそ、
生活者等のニーズを汲み取り、繋ぐことで
新しいかたちの村を復興・再生するチャンス